

# 北海道胆振東部地震におけるネット流言 胆振地方および札幌市におけるアンケート調査をもとに

中村功<sup>1</sup>・中森広道<sup>2</sup>

<sup>1</sup>東洋大学教授 社会学部

<sup>2</sup>日本大学教授 文理学部

## 1. はじめに

2018 年北海道胆振東部地震における情報伝達の実態を明らかにするために住民アンケート調査を行った。対象者は、北海道胆振地方(厚真町・安平町・むかわ町・苫小牧市)および札幌市の 20 歳以上の住民各 100 人、計 200 人である。調査方法はネット調査で、調査期間は 2018 年 12 月 5 日から 2018 年 12 月 7 日である。

## 2. 流言の種類と経過

地震後ネットで流れた流言には、①停電で間もなく断水するという「断水流言」、②停電で間もなく携帯電話が停波するという「携帯不通流言」、③また大きな地震が起きるとい「地震再来流言」などがあつた。

断水流言は地震当日に流れたもので、ツイッターを「市内全域断水」という語で検索すると、6 日の 9 時頃にピークがあつた。これに対して札幌市水道局では当日の内にホームページで「SNS 等で水道に関する誤った情報が拡散されております」と否定している。

携帯不通流言は、「携帯電話 使えなくなる 4 時間」という語でツイッターを検索してみると、これも 6 日午前 9 時台に多く投稿されていた。これに対してオンラインメディアの J-Cast が 6 日 11 時 57 分に「ドコモ携帯が使えなくなるというデマ拡散 広報担当者が否定」という記事を出し、BuzzFeed News も 13 時 04 分にウェブで「デマ」と断定した記事を流している。この記事は Yahoo ニュース(13:17)やツイッターでも流された(福長, 2018)。

地震再来流言は地震翌日の 9 月 7 日から 8 日に流れたもので、苫小牧市役所は 9 月 8 日夜にホームページで次のように否定している。『地鳴り・地響きがなっているので数時間後に大きい地震が来る』『地震計が異常数値を示しているので大きな地震が来る』など、不安をあおるような情報ですが、これらはすべて根拠のないものですので、冷静な行動をお願いします』。

## 3. 流言の広がりと言響

住民アンケート調査によれば、聞いたことのある流言

としては、断水流言が 58.5%と最も多く、地震再来流言は 51.0%、携帯不通流言は 25.5%であつた。

表 1 各流言を知った手段 (%)

メディア	断水流言	地震再来	携帯不通
口づて	61.5	44.1	41.2
メール	8.5	13.7	13.7
ライン	35.9	46.1	45.1
ツイッター	23.1	30.4	37.3
インスタグラム	0.9	5.9	2.0
ネットニュース	6.0	14.7	5.9

流言を知った手段としては、断水流言は口づてで知つた人が 61.5%と最も多く、ついで LINE が 35.9%、Twitter が 32.1%だつた(表 1)。他方、地震再来流言と携帯不通流言は LINE と口づてがともに 4 割強と最も多かつた。

各流言を聞いた人にそれを信じたかを聞いたところ、断水流言を聞いた人は 65.8%が本当だと思つており、携帯不通流言を聞いた人の 62.7%が本当だと思つていた(図 1)。その一方、地震再来流言は 38.2%が本当だと思ひ、前 2 者よりも信じた人が少なかつた。停電により、断水や携帯停波は演繹的に十分あり得ると思われた一方、地震の再来については信ぴょう性が低いようであつた。

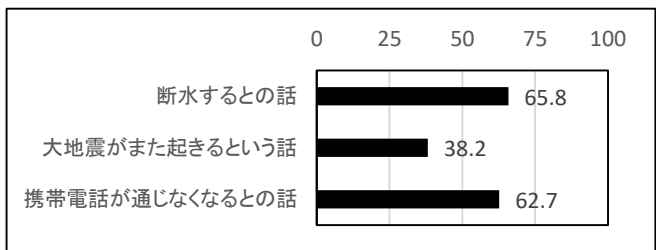


図 1 流言を信じた人 (%)

さらにその流言を聞いて不安に思つたかをたずねたところ、断水流言は、聞いた人の 67.5%が不安になつたと答えた(図 2)。断水流言の不安が高いのは、本当だと思

った割合が高いことと比例している。一方、地震再来流言は58.8%と、本当だと思った人(38.2%)よりも不安に感じた人が多くなっている。これは必ずしも本当だとは思わないが、話を聞くだけで不安に思ったという人がいる、ということだ。大地震発生による被害は断水や携帯不通の被害よりも大きいので、大きな不安をもたらしたのであろう。また携帯電話不通の流言は信じた人は多かったが、携帯不通による深刻度の低さから、信じた人の割合と比べて不安度が低いのだろうと考えられる。このようにみると、人々の間にある流言の不安の大きさは、「信ぴょう性の高さ」と流言が指し示す「内容の深刻度」の積に比例していると考えられる(図3)。

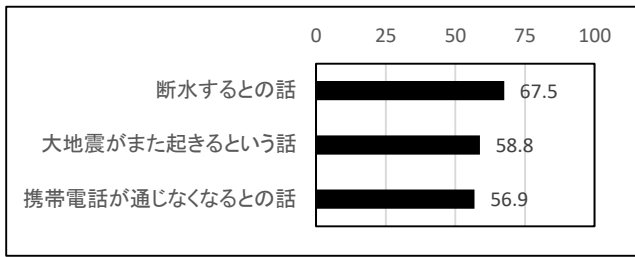


図2 話を聞いて不安になった (%)

$$[\text{不安の大きさ}] = [\text{信ぴょう性}] \times [\text{内容の深刻度}]$$

図3 流言の不安度と信ぴょう性・深刻度の関係

これらの流言のどれかを聞いた人に、流言を聞いてとった行動をたずねたところ、「不安でそうした話の真偽を他の人に聞いて確かめた」という人が32.7%、「念のために、他の人に教えてあげた」という人が26.5%と、周りの人と流言についてコミュニケーションをとった人が多いようである(図4)。こうした行動は流言を広める過程において典型的な行動である。たとえば藤竹(1974)は、流言は事実確認の問いかけにより伝わる、と指摘しているが、そのような古典的なメカニズムといえる。ただ「大事なことだと思ってSNSで拡散した」という人は0.7%と少なかった。これはtwitterなどで広く拡散を要請したりはしないが、近くにいる家族や、LINEでつながる親しい人だけに伝えた、ということなのだろう。また、聞けば不安を引き起こす流言であるが、「そうした不安を他の人と共有でき、少し安心した」という人が流言を聞いた人の19.7%いた。親しい人と、うわさについて、確かめたり、教えたりというコミュニケーションをすることで、不安が低減される現象を見てとることができる。これは流言を広める心理メカニズムの一つであり、橋元(1986)のいう「運命共同体」による安堵の機能である。

他方、「うわさの情報で避難した」という人は1.4%であった。

#### 4. 今回の流言の特徴

メディア的にみると、今回の流言はLINEとロづたえが主役だった。LINEやロコミはクローズドなメディアで、外部からの打消し情報が働きにくい。LINEは日常化によりロコミとの境界がほとんどなくなってきた。ここで広がった流言がTwitterにも転写され、コミュニティー外部にまで滲み出てきたものと思われる。しかもLINEは親密な空間であるがゆえに、口伝えの空間と同様の心理メカニズムが働きやすい。

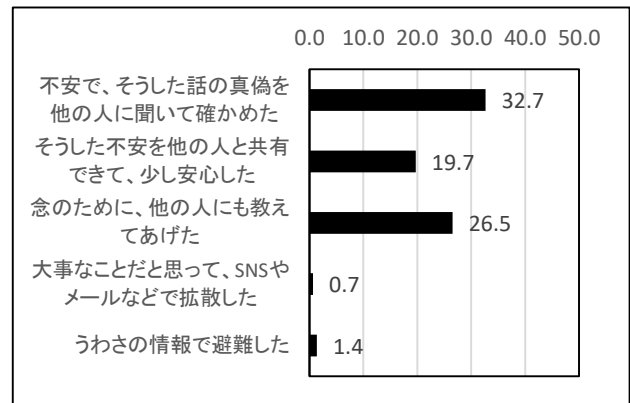


図4 流言聴取後の行動 (%)

さらに今回の流言は内容だけでは流言と判断しにくいものであった。実際に停電で断水した市町村もあったし、携帯電話の基地局も停電で停波し実際に圏外になった地域もあった。事実と異なるのは情報元(「自衛隊員・水道局・NTT職員によると」等)の部分であった。

他方、今回は流言に対する打ち消し情報の発出が迅速であった。いずれも流言が広まった当日に打ち消し情報が出ている。打消し情報を発する元となった情報源には、住民の問い合わせなどもあったが(地震再来流言)、TwitterなどのオープンなSNS空間もあった(携帯不通流言)。ただ、これらの打ち消し情報がどの程度効果を上げたのかは、さらなる検討が必要である。

今回のように迅速な打ち消し情報の発信ができるようになったことはよいことである。しかし今回も古典的流言伝達メカニズムが機能しており、災害後の流言の広がりを抑えるのはなかなか難しいことかもしれない。

#### 参考文献

橋元良明 (1986), 災害と流言, 東京大学新聞研究所編, 災害と情報, 東京大学出版会

福長秀彦 (2019), 北海道胆振東部地震と流言の拡散～SNS時代の拡散抑制を考える～, 放送研究と調査, 2019年2月号, pp48-70

藤竹暁 (1974), パニック-流言飛語と社会不安, 日本経済新聞

